

SEIJIGAKU KENKYU

Studies in Politics

by Undergraduate Students, Faculty of Law,
KEIO University
No. 40 2009

CONTENTS

Articles

- Education Policy in Cambodia, 1991-2006 :
A Study of Political Power and Policy StabilityKUSAKABE, Aki (1)
A Study on the Reduction Policy of the U.S. forces in Korea, Mainly the Case of 2004
.....SHIMUZU, Yuki (33)
Diplomatic Analysis of Hikomatsu Karikawa in 1925-1933 :
Balancing and InternationalismNAKAMUARA, Yoshihiko (67)
Transformation of Japan's External Behavior : Between "Old" and "New" Diplomacy
.....MATSUDA, Hiroki (101)
Freedom of Commercial Speech in AmericaOHSAWA Seminar (139)
The Re-estimation of 'Jiho' as the Political ActorKASAHARA Seminar (171)
The Reaction of the Japanese Mass Media on the Boxer Rebellion
.....TAMAI Seminar (201)

Documents

- Activities Report 2008, Student Committee of Political Science Seminars (241)
Titles of Graduation Thesis for the Academic Year 2008 (247)

Edited by Student Committee of Political Science Seminars,
Faculty of Law, KEIO University
Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345

政治学研究

第 41 号

学生論文集

論文

- フランソワ・ミッテランの欧州観赤崎元太
大平正芳政権の対外政策小川祐介
東アジアにおける地域主義の進展武末健二郎
インターネットと匿名言論田坂創
まなごしを生み出す現代美術中村美喜
日露戦争下の国民生活と意識羽田野貴仁
昭和戦中期における満洲移民奨励施策の一考察山畑翔平
「むかし哲学」から「いま哲学」へ渡部正雄

平成二十一年三月十五日 印刷

平成二十一年三月二十日 発行

慶應義塾大学法学部
政治学科ゼミナール委員会編

- 59) 野球に関する記述は、1905年(明治38年)9月21日、10月4、7、8、11、18、21、22、27日、11月8、12、13、16、19、20、21、23、24、25、29、30日、12月4、5日、翌1906年(明治39年)1月9日、2月4、7、8、12、18日、テニスに関する記述は、1905年(明治38年)9月29日、10月28、29日、サッカーに関する記述は同年11月26日に見える。
- 60) 1905年(明治38年)11月27日の日記に「松旭斎天一の芸美殿座に於て執行せられし故舎生一同見物」とある。
- 61) 1905年(明治38年)9月17日の日記に、「本日は今回岐阜美殿座へ来りし市川羽左衛門、尾上梅幸、尾上菊四郎(六代目)尾上松助の東京歌舞伎一座を見物に行きたり」とある。
- 62) 凱旋将兵の出迎えに関する記述は、その他に、1905年(明治38年)10月26日、11月4日、12月3、8日、翌1906年(明治39年)1月30日にも見え、12月8日は第一軍司令官黒木陸軍大将の出迎えに関する記述である。

昭和戦中期における満洲移民奨励施策の一考察 ——移民宣伝誌を通じてみた満洲イメージとその変容——

山畑 翔平
(玉井研究会4年)

序 章

I 満洲移民政策と宣伝雑誌の沿革

はじめに

- 1 満洲移民政策の沿革
- 2 満洲移住協会
- 3 『拓け満蒙』『新満洲』『開拓』の沿革

小 括

II 満洲開拓民募集のための啓蒙

はじめに

- 1 満洲開拓の意義の変遷
- 2 満洲開拓民像の形成
- 3 混迷期に表出した開拓政策の問題点

小 括

III 開拓地満洲とその生活

はじめに

- 1 楽土として描かれた満洲
- 2 楽土満洲での生活
- 3 理想と相反する開拓地の現実

小 括

終 章

序 章

日本人にとり満洲とは何だったのか。この問いは戦後60年以上経過した現在で

も人心を捉えて止まない。その要因は満洲の持つ二面性にあるのではないだろうか。多くの現代人にとって、満洲と言えば、シベリア抑留や引き揚げなどの戦後の悲劇が連想され、何もない荒廃した土地というマイナスイメージが想起されがちである。しかしながらその一方で、昭和6年9月の満洲事変以降、満洲開拓が国策となって満洲への農民の移住が奨励され、昭和20年の敗戦までの間に約27万人¹⁾もの日本人が移民として満洲へ渡ったのも純然たる事実であり、渡満を決意した農民は少なからず満洲に魅力を感じていたはずである。この相反する二つの事柄が、当時満洲がいかなる魅力を持ったのかということへの興味を掻き立てるのである。そこで、本稿では満洲移民宣伝誌であった『拓け満蒙』『新満洲』『開拓』に目を向け、その誌面において満洲がどのようなイメージを持って語られ、満洲開拓がいかなる手法をもって宣伝されたのかを明らかにしたい。

満洲開拓に関しては数多くの先行研究が存在する²⁾。ただし開拓政策に的を絞ったものや、終戦直前、直後の混乱や悲劇に焦点を当てたものが多く、移民宣伝、特に宣伝誌に光を当てた研究は管見の及ぶ限り非常に少なく³⁾、移民宣伝の研究が十分に成されているとは言えない。

本稿の分析対象を『拓け満蒙』『新満洲』『開拓』とした理由は、これらの雑誌が満洲開拓の宣伝という明確な目的を持ったほとんど唯一の雑誌であり、満洲移住協会という拓務省⁴⁾の外郭団体の機関誌であったからである。そのため、政府が満洲移民に関してどのようなイメージ作り、宣伝を行いたいと考えたかということが最も明確に読み取れるメディアだと言える。本稿では『拓け満蒙』『新満洲』『開拓』の全発刊期間である昭和11年4月から昭和20年1月までを調査期間とした。

最後に本稿の章構成を概観したい。第一章では誌面を分析する前段階として、満洲事変後の移民政策の展開と対象雑誌の性格を解説する。第二章では、『拓け満蒙』『新満洲』『開拓』において満洲開拓政策がいかなるイメージを伴って宣伝されたかを明らかにする。そして第三章では、満洲という土地とそこで生活する人々がどのように描かれたかを明らかにする。

なお、史料の引用にあたっては、旧漢字は原則として新漢字に改め、旧仮名遣いは原文通りにしている。

I 満洲移民政策と宣伝雑誌の沿革

はじめに

誌面を分析する前段階として本章では、満洲事変後の満洲移民政策がどのように展開されていったか、そして満洲移民宣伝誌であった『拓け満蒙』『新満洲』『開拓』がいかなる性格を持つ雑誌であったかを解説する。以下、第一節では満洲事変から終戦までの満洲移民政策の沿革を、第二節では『拓け満蒙』『新満洲』『開拓』を発刊していた財団法人満洲移住協会の活動を、第三節ではこれらの雑誌の沿革を概観していく。

1 満洲移民政策の沿革

日本が満洲において実質的な植民地支配を行った昭和6年の満洲事変から昭和20年の終戦までの間、日本の農民は国策のもとで組織的に満洲に移住した。本節ではこの満洲移民政策の沿革を概観する。

昭和6年9月に満洲事変が勃発し、翌年3月に満洲国が建国される一連の動きの中、農政学者で私立日本国民高等学校校長の加藤完治ら⁵⁾を中心として対満農業移民の即時断行論が主張され、これを受け関東軍と拓務省は同年、試験的な対満移民を実施した⁶⁾。この試験移民によって、移民の定着が可能であることが証明されたことと、昭和11年の二・二六事件を契機とする軍部の政治的発言力の強化を背景に⁷⁾、関東軍は同年、向こう20年間に100万戸、500万人の日本人農民を満洲に移住させるという計画をたて⁸⁾、広田内閣の正式国策とすることに成功した。計画概要は昭和12年以降20年間を5年毎に分け、第一期に10万戸、以後は毎期ごとに10万戸を増加するように計画され、1957年に計画が完了すれば100万戸となる予定であった。この「二十ヶ年百万戸送出計画」に基づき、本格的な満洲農業移民政策が、昭和20年の日本の敗戦まで継続実施されることになったのである。

さて、満洲農業移民は移民団を構成して入植した。移民団はその規模によって、集団移民団(200~300戸)、集合移民団(30~100戸)、分散移民(それ以下で補充的なもの)の区別があった。また、昭和13年には、未成年男子を集め、訓練期間を経て移民団に移行させる満蒙開拓青少年義勇軍の制度も作られた。このほか林業、酪農、特用作物栽培などを主目的とする移民、戦時経済統制で企業整理の対象と

なった中小工商业者を中心とする転業移民もあった⁹⁾。

移民団の編成方法としては、初期の試験移民をのぞけば、町村や郡、府県を単位に募集する地縁主義が原則であった。中でも経済更正政策との関連からは、農家戸数と耕地面積の統計をもとに町村ごとの過剰農家数をはじき出し、その過剰分で一移民団を作る「分村移民」方式が政策モデルとされた。しかし、移民政策が本格化して間もない昭和12年7月に勃発した日中戦争による兵力・労働力の需要の急増で国内の人口環境は一変してしまった。前述の青少年義勇軍も、こうした変化の中でなお一定の日本人農民を満洲に送り込むための方策として考えられたのだが、成人移民については、分村で一団を編成するのが無理なら、地縁の単位を郡にひろげる「分郷移民」が次善の策とされたのである。

こうした労力不足は昭和16年12月8日の日米開戦後いよいよ深刻化していき、満洲移民は国策とされながらも、政策としての移民送出の優先度は低下することとなる。こうした方針の変化が最初に見られるのは、昭和17年12月8日に満洲国開拓総局が決定した「康德十年度開拓政策実行方策」である。これは昭和18年度の具体的な移民方策を提示したものであり、太平洋戦争に対応した移民方策の修正でもあった。

これ以前の昭和16年12月31日に発表された満洲開拓第二期五カ年計画は、太平洋戦争勃発への考慮はなく¹⁰⁾、昭和18年度の入植予定戸数を25,600戸としていたのに対し、康德十年度開拓政策実行方策では入植予定戸数は19,680戸とされ¹¹⁾、大きく減少することになったのである。さらに移民方策の中心として新規入植ではなく団員不足の移民村への補充入植が提示されたことは、第二期五カ年計画が計画後僅か1年で、太平洋戦争の影響からその実行が不可能であることを示していた。

このように、満洲事変以降、満洲移民政策は急速に発展したが、戦時下の情勢の変化によって移民送出が次第に困難となっていき、日米開戦後はその政策としての優先度が低下し、入植計画にもそれがはっきりと表れるようになったのである。

2 満洲移住協会

本節では、財団法人満洲移住協会がどのような経緯で設立され、同協会がどのような事業を行っていたか、また協会にはいかなる人物が関係を持っていたかを解説する。

満洲への試験移民が成功の兆しを見せ始めていた昭和9年、関東軍主催の対満農業移民会議が新京において開催された。この会議には関東軍特務部の移民関係者や拓務省関係者、加藤完治グループなどが参加し、そこで提出された「満洲農業移民根本方策案」¹²⁾に基づき、日本国内に移民助成機関を設置するという方針が示された。この会議の後、関東軍、ついで拓務省がこの方針を踏襲した案を審議作成し、大量移民送出期直前の昭和10年10月19日、国内に設立されたのが満洲移住協会であった¹³⁾。

同協会は、移民事業の促進ならびに後援、移民事業に関する調査宣伝および紹介、移住者の斡旋、移住者の訓練、宿泊所の設立および経営、その他移民事業達成に必要な事業を行うとされ、移民募集事業の主体である各府県を側面から援助し、拓務省を助けて国内で移民の送出に当る役割を担うことになった。

さて、上記の協会の事業の中で、宣伝活動はとりわけ重要であった。小林弘二は協会の宣伝方法が次のような形で行われたと論じている。すなわち、「まず各年度の募集計画の実施にあたって、協会は各府県と協議のうえ、府県内市町村をいくつかのグループに分ち、町村長、青年学校・小学校校長、農会および産業組合、青年団、在郷軍人分会、婦人会などの代表を集め、募集計画について説明し、宣伝を行う。ついで宣伝を末端にまで浸透させ、移民への参加を呼びかけるため、各市町村、さらには部落レベルにまで講師を派遣し、講演会、映画会などを開催」¹⁴⁾していたということである。こうした精力的な活動からも明らかのように、移民宣伝は協会の事業として重要な位置を占める活動であり、その宣伝活動の重要な一環として、機関誌の刊行があったのである。

最後に協会理事の顔触れを紹介しておく。会長と副会長は名誉職であり、運営面の最高責任者は理事長であった。歴代理事は順に、大蔵公望、小磯國昭、石黒忠篤、小平権一であり、「拓け満蒙」創刊時から終始理事の地位にあったのは、大蔵と石黒の他、佐藤貞次郎、永雄策郎、加藤完治、那須皓、橋本伝左衛門、下村宏（下村海南）、津崎高武、堀切善次郎であった¹⁵⁾。いずれも満洲開拓政策と深い関係を持つ人物である。石黒、小平、加藤、那須、橋本は加藤完治グループ、大蔵はかつて満鉄理事を務めた貴族院議員、堀切は移民発足時に拓務次官であった貴族院議員、小磯は陸軍次官・関東軍参謀長として移民送出に関係しており、また理事長就任以前には拓務大臣として協会会長の任にあった。

以上、満洲移住協会の設立経緯、協会の事業、また協会関係者を紹介した。

3 「拓け満蒙」「新満洲」「開拓」の沿革

拓務省の外郭団体であり、満洲移民の助成機関であった満洲移住協会の機関誌として、「拓け満蒙」「新満洲」「開拓」という一連の雑誌は、満洲移民の宣伝誌という役割を担っていた。

昭和11年4月号を創刊号とする「拓け満蒙」はその後、昭和14年4月号からは「新満洲」、昭和16年1月号からは「開拓」と二回誌名を変更し、昭和20年1月号まで発刊された。この間、情勢の変化や誌名の変更により雑誌の編集方針は変化することになるが、創刊号における協会初代理事長大蔵公望の「今日の如く我国朝野の人士の大部分がこの重大なる満洲移住の問題に関心を有せず、中には今だに反対を唱へる人も相当ある様な時代に於ては特にあらゆる方法により此問題の重大性を我国民全部に認識せしめねばならず、「拓け満蒙」は主として此の目標に沿うために生まれたもの」であり「本誌の使命は他の普通の雑誌とは異り具体的に満洲移住奨励の目的を持つ」¹⁶⁾との言を見出すことができるように、満洲移民の宣伝誌という大枠は一貫していたと考えて良い。

雑誌の誌面上では実に多様な人物が執筆を行っている。政治家、軍人、官僚、協会職員、関係団体職員、開拓団関係者、学者、ジャーナリスト、文学者など、多方面、各層の人物が誌面に登場した¹⁷⁾。なお、雑誌の発行部数は不明である。

以下、「拓け満蒙」、「新満洲」、「開拓」に分けて、それぞれの雑誌の紹介を行い、いかなる編集方針のもとに移民宣伝が行われたかを分析する¹⁸⁾。

【拓け満蒙】は、昭和11年4月～昭和14年3月まで発刊された月刊誌であり¹⁹⁾、価格は15銭、頁数は創刊号が20頁であったが、徐々に増頁され昭和13年初頃から約60頁となった。

創刊号において、「本誌は都会に於る知識階級の人々にも十分の熟読を希望するが更に又た田舎の農村青年諸君には是非一人残らず読んで頂くことを希望」²⁰⁾するとされているように、主たる読者層は農村の青年と都市の知識人であった。満洲への主たる移民者層が地方の農民であったことと、満洲開拓政策が悲観的に見られていたことが背景となり、こうした読者層が想定されたのである。

【拓け満蒙】期の誌面は、発刊当初は移住地報告や回想録の類が主であったが、その後、満移ニュース、満洲講座、時事解説、連載小説、座談会記事、投書類、満洲の紹介等、様々な記事が加えられていくが、満洲移民関連の宣伝記事がほとんどであった。移民政策に関してはひたすら肯定的で楽観的な主張で終始して

り、「拓け満蒙」期には政府の歩調と合わせて国策宣伝に努めていたと言える。

次に「新満洲」の紹介を行う。昭和14年4月の誌名変更によって生まれた「新満洲」は昭和15年12月まで月刊で発刊され、価格は20銭、頁数は220頁前後であった。

誌名変更の理由は、「拓け満蒙」昭和14年3月号に掲載された誌面変更予告において、「決して単なる機関誌に甘んずることなく、『国策満洲移民の唯一の月刊雑誌』であると同時に、『満洲のことなら何でも判る』雑誌として権威と貫禄と、そして百万読者を擁する一大雑誌たらんとするものであります」²¹⁾とされており、満洲開拓政策が国策としての盛り上がりを見せる中で、機関誌としての更なる発展を目指したのであった。読者層としては「拓け満蒙」期と同様だと考えて問題はないだろう²²⁾。

【新満洲】誌面においては、「拓け満蒙」期のような移民関連記事だけでなく、広く満洲に関する記事が盛り込まれている。多彩な記事内容を盛り込むことによって国民に広く満洲移民の呼びかけをしたいと考えたのであろう。時局読本、農村問題の常識、義勇軍現地報告、開拓地の近頃、内原だより、ふるさとだより、父兄と家族の頁、小学生欄、開拓文苑、満蒙開拓相談欄、新満洲談話室などの欄が新設され、後には満洲語講座、大陸農業の手引きが加えられた。

雑誌の宣伝的な性格としては、「拓け満蒙」と同様、楽観的な宣伝がほとんどである。ただし、例外ではあるが、昭和15年初頃頃から、農村労力不足からくる送出困難や満洲における営農上の諸矛盾が誌面において指摘され始めた²³⁾ことは注目すべき点である。【拓け満蒙】期から一貫して続いてきた満洲開拓の良い面だけを強調した誇大な宣伝を考慮すれば、こうした問題点を指摘する記事の存在は数少ない例外であるとはいえ明らかな変化である。この時期はその後の【開拓】への経過点であったと考えられる。

最後に「開拓」の紹介を行う。昭和16年1月に「新満洲」から誌名変更された月刊誌【開拓】は昭和20年1月号をもって停刊されたと思われる。価格は20銭(昭和19年10月号から40銭)、頁数は誌名変更当初は約150頁であったが、紙不足によって徐々に減頁し昭和18年6月号からは約60頁となった。

誌名変更の直接的な理由は、満洲国で同名の雑誌が存在していたという非常に単純な理由であった。ただし、決してこうした偶然の理由だけによるわけではない。「編輯後記」において、「満洲の開拓も自から意義が異なつて大東亜共栄圏の重要な礎石を築かなければならぬ意義が附与され、更にその開拓者の選出に当

つても従来のようなチンドン屋式の宣伝では到底困難となって来たことも事実である。……そういふことになると本誌の使命も考へなほさなくてはならぬことになる。宣伝的傾向を排して専門的内容充実に向ひたいと思ふ²⁴⁾と論じられたように、満洲移民宣伝誌の目的が以前のような移民者層への直接的な宣伝から専門的な知識を養う役割に変化したのである。戦時下の労力不足による移民送出困難という壁に突き当たったことで、この時期になるとそれまでのような誇大な移民推奨宣伝を継続するよりも難局打開の方策を訴えるべきというように編集方針が変化したのであろう。こうした変化とともに、「開拓」においては対象とする読者も村の有力者や教師などの指導者層へと変化したのである。

このような雑誌の性格の変化は、満洲一般に関する記事の減少、開拓団員や義勇軍隊員の手記類など、移民の実情を伝える記事が減少していることや、移民政策を批判する記事や、その問題点を指摘する記事が継続的に掲載された²⁵⁾ことからもうかがえる。さらに、頁数が急減した昭和18年の半ば以降になると、具体策を論じる記事が減り、当初の「満洲移民宣伝誌」という目的からは遠ざかっていく。

以上、本稿の分析対象である満洲移民宣伝誌「拓け満蒙」「新満洲」「開拓」を紹介し、楽観的な宣伝が目立つ「拓け満蒙」「新満洲」とは対照的に「開拓」は専門誌としての色彩の強い雑誌であったことを明らかにした。

小 括

以上、本章では次章以降の内容分析の理解を助けるため、満洲開拓政策の沿革、満洲移住協会の活動、分析対象とした雑誌「拓け満蒙」「新満洲」「開拓」を紹介した。その中で以下のことが明らかになった。

第一に満洲開拓政策が国策とされるほどに展開されながらも戦時下の労力不足という壁に突き当たり、移民送出の優先度が低下せざるを得なかったこと、第二に財団法人満洲移住協会が、各府県・拓務省を援助する役割を担い、その中で宣伝活動がとりわけ重要とされたこと、第三に「拓け満蒙」「新満洲」「開拓」が一連の雑誌でありながらも、第一節で論じた開拓政策の展開の影響を受け、その内容を変化させたことである。

II 満洲開拓移民募集のための啓蒙

はじめに

本章では、「拓け満蒙」「新満洲」「開拓」において満洲開拓とはいかなる活動であるか、またいかなる活動であるべきとされていたかを分析することにより、満洲開拓政策のイメージがいかに形成され変容したかを明らかにする。

以下、第一節では満洲開拓の重要性がどのように主張されたか、第二節では理想的とも言える満洲開拓民像がどのように形成されたか、第三節では、満洲開拓政策の混迷期とも言える「開拓」期において、いかなる問題提起がなされたのかを明らかにする。

1 満洲開拓の意義の変遷

満洲開拓の重要性を説くにあたり、満洲開拓がいかなる意義を持つかという主張が誌面において展開されることになる。本節ではかかる主張がどのように展開され、日本や農村を取り巻く情勢によってそれがいかに変化したかを論じる。

満洲移民が国策とされていなかった昭和11年4月の「拓け満蒙」発刊当時、世間一般の満洲移民送出活動に対する認識は薄く、知識人の間でも満洲移民に対して否定的な見方が多かった。例えば、「拓け満蒙」においては、「知識階級の人々の間に満洲移住不可能論や移住費用が余り多くかかり過るなどの偏見がある事も誠に痛嘆す可きですが又一方実際に移住実行の任に当る可き農村子弟の間に於ても此れが其等の人々にとつて極めて有利であるに係らず今尚ほ渡満移住を危んで県によつては誰一人移住応募者のない所もあるのは実に遺憾千万だと云はねばなりません²⁶⁾と論じられることも多かった。かかる状況を反映し、満洲開拓の意義を主張することにより世間一般の満洲移民に対する認識不足を是正し、満洲開拓の重要性を認識させようとする意見が誌面に表れるのである。

まず、昭和12年7月の日中戦争勃発までは、満洲開拓の意義として、農村問題の解決策としての側面がことさら強調された。つまり、「今や最も困難なる土地問題解決への第一歩は踏み出されたのである。これを契機として、農耕地問題の全面的解決への有力なる一助として利用すべきである²⁷⁾というように、農村更正の観点から満洲開拓の意義が説かれたのであるが、その背景には当時の農村の困窮があった。昭和恐慌以来の地方農村の疲弊に加え、狭小な耕地に多くの人口

を抱える内地の農村では、子供に分け与える耕地がないことや、都市に出ても働き口がないことから、二、三男以下がいかにして生計を立てていくかという問題があったのである²⁸⁾。

しかし、日中戦争勃発によりこのような人口環境が一変すると移民政策の意義付けについても変化が生じる。軍や工場へ多くの成人男性が動員されたことで、農村は一転して労力不足となり、それまでの人口の過剰の解決策としての満洲移民の説得力は失われることになったのである。日中戦争勃発後、誌面においては、「満洲移民は事変等に依つて既定方針を変更する様なことは絶対になく、かかる非常時にこそ却つてその重要性を加へるものである²⁹⁾」というように、日中戦争や労力不足によって満洲開拓の重要性が減じるわけではないとの弁明に近い主張が展開された。さらに、それまで強調されてきた「農村問題の解決策としての満洲移民」に代わり「国防政策としての満洲移民」の意義が強調されるようになった。例えば、「大量移民の入植の暁は結局戦争の惨禍を回避して、治安国防上大いに強化するのであり、東洋平和永遠の確保に絶大の意義があり最大の急務である³⁰⁾」というような主張がそれである。こうした意義付けは、日中戦争による労力不足を反映した方針転換をうかがわせていた。さらに、日中戦争勃発の半年後の昭和13年1月には満蒙開拓青少年義勇軍の募集が開始されることになるが、未成年を満洲に移住させるこの計画は、成人男性の送出国難になったことへの対応策でもあり、「青少年諸君が多数に渡満すると、ただそれだけで我国の大陸国防第一線は強化される…国境第一線の背後に優秀な多数の青少年諸君が特機の姿勢にあることはどれ程力強いことか判らない³¹⁾」と説かれ、義勇軍募集宣伝においても、国防的見地からの意義が一層強調されたのである。

日中戦争が長期化の様相を呈してきた昭和14年、朝鮮半島で起きた大旱魃をきっかけとして、戦時下の食糧供給に対する不安が持ち上がると満洲移民を食糧問題への対応策と捉える見方が現われる³²⁾。これ以降、「わが食糧増産の根本策は究極するところ満洲の開拓以外にはないことを痛感し、今更年ら満洲開拓の重要性を新たに自覚せしめられた³³⁾」という記事に見られるように、誌面では満洲の食糧供給地としての重要性が満洲開拓の意義として付け加えられるのである。

さらに、同時期に活発になっていた農村再編成や産業再編成問題が語られる時にも、食料増産の方策として満洲移民に言及されることが多かった。例えば、「農産物の増産を必要とする今日、……内地農家を適正規模の農家に再編成すると共に、大陸に思ひきつて多数の開拓民を送ることは農村人口保有の一点のみよ

りするも、真に必要なことである³⁴⁾」や「我国の産業再編成に伴つて当然発生すべき商業転失業者に対し如何に更生の途を見出して行く可きかは重大な問題となり……その一部を満洲開拓農民として新たなる生産部面に転換して行くことになり、……当業者に於ても既にこの方面に向かつて猛然と奮起し各地に満洲進出の気運が向いて居るのであります³⁵⁾」というように、産業再編成の動きに伴って満洲に移民を送るべきだと主張されたのである。この頃になると、満洲開拓の魅力をアピールすることよりも、差し迫った食糧不足を解決することの方が根本的な目的となっていた感がある。

次に変化が見られるのは昭和16年12月の日米開戦後である。日米開戦によって南洋への関心が高まり、満洲の重要性が下がることへの危機感があつたようで、それに抗する反駁が誌面で行われる。例えば「南方熱帯圏がひらけた事を以て、満洲の意味が減じた如くおもふこと以上に認識不足はない³⁶⁾」という主張がその典型であり、こうした議論の中には、大東亜共栄圏の中での満洲の重要性を再確認させる意図が読み取れるのである³⁷⁾。宣伝誌においてこのような傾向が見られることは、現実として満洲の重要性が低下していると認識されていたことの証左であろう。その中で、大東亜共栄圏における満洲の重要性を説くに当たっては、南洋への移民が不可能だと主張されることが多かった。志村陸城が「精神的肉体的なる民族の本質の護持培養を考へるとき、それは決して豊穡常夏の南地には求められない。……寒冷・凜風の吹く天地こそ、民族の本質を強健に保持培養するものである³⁸⁾」と論じたように、南洋は農業経営上適さないだけでなく、長期的視野にたった民族培養の地として絶対に不適切だとされたのである。こうした主張をしなければならないほど、南洋に比して満洲への関心が薄れていくことへの危機感が生じていたのである。

このように、日本を取り巻く情勢に応じて強調する側面を変化させ、新たな意義を付与することにより、誌面上で満洲開拓の重要性がアピールされてきたが、太平洋戦争末期に至ると、満洲開拓の意義は誌面で殆ど論じられなくなっていく。その背景としては、戦時下の労力不足による移民送出の優先度の低下があつた。

以上、満洲開拓の意義として強調される事柄が時局を反映し、農村更正からの観点、国防政策からの観点、食糧供給地としての観点、大東亜の要としての観点というように変化していったことを明らかにした。

2 満洲開拓民像の形成

満洲事変後に満洲開拓が脚光を浴び、その後国策として大規模な入植が行われることになるわけであるが、「拓け満蒙」発刊当初はもちろん、国策となっても必ずしも世間一般に満洲開拓、満洲開拓民が良いイメージを持たれているわけではなかった。かかる状況の中、誌面上でいかに満洲開拓民のイメージを形成しようとしたのかを本節では明らかにする。

「拓け満蒙」発刊当初から誌面において一貫して主張されたのは、満洲開拓が東亜新秩序建設の礎石となる大事業であり、満洲移民は「平和の戦士」³⁹⁾であるということだった。例えば、「惟ふに古来の列強の植民政策は弱肉強食の政策であつた。然し日本の満洲移植開拓は之と類を異にし、真に共存共栄相互依存の下に日満の結合を図り東洋の安定、世界人類の福祉に貢献しなければならぬのである」⁴⁰⁾というように、満洲開拓には理想があり、最も重要な国策であつて、満洲開拓民は平和の造出者であると強調されたのである。加えて、満洲開拓を国策として盛り上げようとする意図は、出征兵士のように大々的に見送られる開拓民の写真が掲載されたことや⁴¹⁾、雑誌上で満洲移民関連の懸賞募集が度々行われていたことにも表れている⁴²⁾。

誌面においてかかるイメージ作りが行われた要因は何だったのであろうか。それは当時の一般の「移民」に対するイメージと関連している。つまり、当時は移民と言えば南米が連想され、移民＝日本を捨てて出稼ぎに行った利己的な人間というイメージが根強かつたのである。そもそも満洲への植民に「移民」ではなく「開拓民」という呼称を用いたのもこうした状況を反映していた側面があつた。例えば、「満洲移民は単なる出稼式移民でなく日満不可分関係に基礎を置き、…満洲国の開発を行ふと言ふ重大な意義を有する」⁴³⁾というように、満洲移民が他の地域への移民とは根本的に異なることが強調されたのである。

さらに、こうした理想的な満洲開拓民像を形成し、満洲開拓や開拓民への憧憬を読者に抱かせるべく、誌面には数多くの美談が掲載された。美談として掲載されるエピソードは現実離れた理想的なイメージではあつたが、読者の憧れを煽るという観点からは少なからぬ効果を持つたと考えられる。例えば「陸の生命線へ進むもの兵庫県満洲移民感激篇」⁴⁴⁾では、体が小さいため軍人になれないことに落胆していた青年が、それならばせめて満洲移民として国のために尽くしたいとの考えを持って渡満したという美談が掲載されている。このように、開拓民は

満洲の重要性を認識し、軍人同様に国家のため、理想に向かって満洲の広野を切り開くイメージで語られたのである。こうした理想像は、特に義勇軍に憧れる青少年へのアピールとしての効果を狙つたものであろう。

また、「銀座から大陸の花嫁に」⁴⁵⁾は、女学校を卒業して都会で働いていた裕福な女性が、華美な都会での生活に嫌気がさし、開拓民の妻になつたという美談であり、内地では一度も農作業をしたことがなかつたものの、満洲での生活にもすぐに慣れ、のんびりとした豊かな生活を送っているとのエピソードが紹介されている。実際には、大陸の花嫁の大部分は農家出身であり、こうした女性は少数派中の少数派であつたであろうが、満洲開拓に対する女性の意識が低いことが常々問題視されていた⁴⁶⁾当時において、都会の女性でさえも満洲開拓の重要性を的確に認識しているという美談を掲載することは、むしろ農村の女性に対してのメッセージとして大きな効果を持つたと言えるだろう⁴⁷⁾。

最後に、開拓民を送り出す家族の姿が描かれた美談について触れておく。「南郷村満洲移民実話集」⁴⁸⁾には大地主が二人の息子を満洲移民として送り出した美談が紹介されている。その中では、「これ程の地主が可愛い十七、八の子供を二人迄も満洲移民として渡満させたと云つたら、満洲移民の大きな意義を理解しない人達にとつては驚き以上の驚きであるに違いないだらう」との一節が記されている。このような話が美談として登場する背景には、子供が移民を希望しても反対する親が多い⁴⁹⁾という現実が存在していたのである。

以上、満洲開拓は他の移民とは根本的に異なる聖業であるという主張がされ、さらにそれに伴い、満洲の重要性を認識した理想の開拓民像が誌面に表出したことを明らかにした。

3 混迷期に表出した開拓政策の問題点

第一節、第二節では、満洲開拓の重要性を主張したり、理想の満洲開拓民像を形成したりしながら、満洲移民送出が宣伝されたことを論じてきたが、「開拓」期、特に日米開戦後の満洲開拓政策の混迷期においては、そうした積極的な宣伝と呼べる記事数は減少する。これに加え、開拓政策の問題点を取り上げた記事や、それまでの極端な宣伝姿勢に対する批判が目立つようになる。「従来の開拓民送出方法が、最近に於ける客観的諸情勢の急激な変転に際して破綻したことを示すものに外ならない」⁵⁰⁾と論じられたように、この時期になると、戦時下の労力不足によって開拓民の送出が壊滅的な打撃を受けていることが吐露されていたの

である⁵¹⁾。無論この時期においても、批判論で誌面が埋め尽くされたわけではなく、満洲移住協会の機関誌であり宣伝誌という性格上、こうした議論が継続的に出ること自体、注目される変化と言える。

開拓政策の問題点を指摘する議論の中で、当時開拓民の大部分を占めるようになっていた義勇隊開拓団への移行に伴う問題がよく誌面で論じられた。すなわち、昭和16年、満蒙開拓青少年義勇軍が3年間の訓練を終え、初の開拓団に移行することになるが、実際には軍隊への入営者が続出し、中には三分の一しか団員が残らない義勇隊開拓団もあったのである⁵²⁾。こうした状況を反映し、従前の義勇軍養成の方針を問題として、それを再検討すべきであるという議論が誌上で行われた。例えば、開拓団移行の構想について「まだ十分に議の尽されてないものがあることを痛感する」⁵³⁾というように問題視されたわけである。

なぜこうした問題が発生したのであろうか。それは、そもそも青少年義勇軍は日中戦争勃発による労力不足の解決策という側面の強いものであったため、徴兵適齢前の未成年が渡満することに意義があったからである⁵⁴⁾。しかし3年間という訓練期間によって、多くの義勇隊員は徴兵適齢に達し、彼らを開拓民とすることには普通移民と比較した場合のメリットもなくなってしまったわけである。彼らは普通移民とは異なり3年間もの訓練を受けた、高い生産性を持つ言わばエリート農民という考え方ができないわけではなかったが、実際には、義勇軍開拓団が普通移民と比べ良い営農成績を収めたわけではなく、政府の補助金も普通移民団と同様に給与する必要があった⁵⁵⁾。戦時下において引く手あまたの青年層を3年間訓練してそのまま開拓団に移行させるだけの必然性が失われてしまったのである。

最後に、都合の良い部分ばかりを強調してきた宣伝方針への反省を求める議論が頻出したことも指摘しておく。例えば、「現在の役人の募集の仕方を見ますと、兎に角役目で集めさへすればよいと云ふ風です……北満も南満も区別なく出鱈目を言つて人を集めて送り出した。……全く募集と云ふことはもつと真剣にやつて頂きたいと思ひます」⁵⁶⁾や「今迄の啓蒙的運動に依つては、開拓民応募者を得るに非常な困難を要し、またその困難を敢てしても予定数を得ることは全く不可能の有様にまで陥つたのである」⁵⁷⁾というように、以前の宣伝方針に対する批判論を掲載していることの裏には、「もうこれ以上満洲に移民を送る必要はない」という当局の本音があったと見ることもできるであろう⁵⁸⁾。

以上、満洲開拓政策の混迷期においては、積極的な宣伝記事に代わり、開拓政

策の問題点や、それまでの極端な宣伝姿勢に対する批判が誌面に継続的に表れたこと、その背景には、指導者層向けという「開拓」の性格とともに、労力不足により開拓民送出活動がいよいよ困難に突き当たっていたという現実があったことを明らかにした。

小 括

以上、第一節では日本や農村を取り巻く情勢によって、満洲開拓の意義として強調される事柄が時期によって、農村更正からの観点、国防政策からの観点、食糧供給地としての観点、大東亜の要としての観点というように変化したことを、第二節では満洲開拓・満洲開拓民がいかに理想を目指す素晴らしいものであるかが他の移民との比較を通して強調されたことを、第三節では満洲開拓政策の混迷期とも言える「開拓」期において、それまでの積極的な宣伝に代わり、開拓政策の問題点や、それまでの極端な宣伝姿勢に対する批判が噴出したことを明らかにした。

本章で明らかにした誇大な宣伝から批判的な言論への変化は、雑誌の編集方針の転換と共通した変化の仕方であり、その背景には第一章第一節で解説した開拓政策の優先度の低下があった。

Ⅲ 開拓地満洲とその生活

はじめに

本章では、満洲という土地、そしてそこでの生活が【拓け満蒙】【新満洲】【開拓】においていかなるイメージで描かれ、紹介されたのかを明らかにする。

以下、第一節と第二節では、主として【拓け満蒙】【新満洲】期における宣伝を分析することで、それぞれ満洲という土地、満洲での開拓民の生活がどう描かれたのかを明らかにし、第三節では、【開拓】期においてそれがどう変化したのかを明らかにする。

1 楽土として描かれた満洲

【拓け満蒙】【新満洲】においては、満洲が豊かな楽土として描かれている。そしてそこからは、日本内地との対照性を強調する意図が読み取れる。こうした傾向は、【拓け満蒙】【新満洲】期に、毎号掲載された開拓地の写真によく表れてい

る。満洲には未開の広野が広がり、土地は肥沃で無肥料で作物ができるということが強調され、満洲での農業はトラクターなどの機械も用いた大規模なものであり、収穫量は内地と比べ物にならないことが視覚的にアピールされた⁵⁹⁾。もちろん、写真に限らず、開拓団員の手記類にも「せまい内地の固苦しい農業より此の広い沃野は皆様のお出を待つて居ります。無肥料で作物は立派に生長致します」⁶⁰⁾というように写真と同様のメッセージが表れていたが、写真の持つインパクトは読者にとって大きなものであったことが想像される⁶¹⁾。

満洲が内地の農村と対照的に描かれたことには、主たる満洲移民の送出元である内地の農村が当時貧困に喘いでいたという背景がある。当時の農村は、狭小な耕地、そして肥料不足に悩まされていた。こうした問題を抱えていた日本の農村と対照的な土地として満洲を描くことで、内地農村の貧農に満洲への憧れを抱かせようとしたと言える。

さて、このように内地とは対照的な豊かな大地として満洲が描かれたことと並び、誌面からは満洲に対するマイナスイメージを是正しようとする意図が窺える。誌面においても「満洲と言へば何かとても遠く恐ろしい国へでも行くやうにいやがる人が少くありません」⁶²⁾と論じられているように、世間一般には楽土としての満洲イメージより、満洲に対するマイナスイメージの方が強く抱かれていたことがわかる。マイナスイメージの最たるものは、匪賊であった。辺境の地、満洲は野蛮な匪賊の巣窟であると考えられていたわけである。誌面においては、「昨昭和十年になりまして匪賊は皇軍のお蔭を以て大体治まりました」⁶³⁾というように現在の満洲は平和であり匪賊の心配はないということが常々主張されていた。協会理事広瀬寿助による「満洲匪賊ノ話」⁶⁴⁾など、匪賊に関する知識を読者に伝える解説記事が誌面に表れたことも、それだけ匪賊に対して内地の日本人が不安を持っていたことの証左であろう。

匪賊に加え、気候や衛生面に関しても多大な不安が抱かれていたことが誌面から窺える。満洲の気候は内地とは比較にならないほどの過酷な気候であり、夏が非常に暑い上に冬は非常に寒い、さらに衛生環境は劣悪で病気が蔓延しているというイメージが抱かれていたのである。これに対し、誌面においては「移住地の衛生状態は概して良好である、地方病、流行病と云ふものはなく水質は至つて良好、患者は胃腸病、感冒性疾患位のものである、冬期には凍傷患者若干名を出したが後害を及ぼすほどのものはない」⁶⁵⁾というように、そうした認識が正しくないということが再三主張されていく。

このように、「拓け満蒙」「新満洲」においては、「貧しい日本内地と対照的に豊かな満洲」というイメージを打ち出すと同時に、満洲に対するマイナスイメージを払拭する主張を展開することで、「楽土満洲」というイメージを形成しようとする意図が読み取れる。

2 楽土満洲での生活

満洲が楽土として描かれたことは前節で紹介したが、そこで暮らす開拓民の生活はどのようなイメージを伴って紹介されたのであろうか。本節では「拓け満蒙」「新満洲」を中心に検討し、それを明らかにしたい。

誌面においては開拓民が物質的に豊かな生活を送っていることが盛んに紹介されている。その手法は、第一節で論じたことと同様、内地での生活との対照性を強調することであった。例えば、「内地の小天地に跼蹐して、窮迫の生活を送るよりも、振つて満洲の地に至り、肥沃なる十五町歩の大地主になられるがよからう」⁶⁶⁾という経済学博士永雄策郎の主張や、「開拓民は所有地は全部同格で、家も同じ、財産も同じと言ふ様に小作人も地主もない」⁶⁷⁾との開拓女性の感想に表れているように、満洲に渡れば、内地の農村とは違い小作人として厳しい生活を送ることはなく誰もが大地主になれるということが主張された。また、「豊かな生産物に恵まれて内地でも及ばぬ結構な食事を頂いて居ります」⁶⁸⁾というように、開拓地には食糧も豊富にあり、内地とは違って食べ物に困ることはないという物質的な豊かさがアピールされた。このように日本の農村と対照的に満洲という土地が描かれたのと同様、開拓民の生活についても当時の内地農村の状況を反映して、満洲移民の主たる送出元である内地の貧農に夢を抱かせるようなイメージ作りが展開されたのである。

その一方で、満洲のような辺境の地で果たして人間的な生活が送れるのかという不安が世間一般には抱かれたようであり、第一節と同様、開拓地での生活についてもこうしたマイナスイメージを是正する意図が誌面から窺える。例えば、「学校が出来、自治制が布かれ、組合が設立され、病院も完成近く、モウ直き鉄道も来る」⁶⁹⁾との開拓民の現地報告のように、学校・病院・神社・役所・電気・娯楽などの社会インフラが急速に整備され、移民村が発展していることが頻繁に紹介されている。開拓民についても、「現地で生れた子供が最早三百に達せんとしてゐる。両親も来た。兄弟姉妹も来た。ほつほつ移民地内でお嫁さんのやり取りが始まつてゐる」⁷⁰⁾というように、年寄りも多く生活し、花嫁もたくさん来て、

子供も多数生まれていると語られた。また、「生活が窮屈でない、余裕があり落付いてゐる」⁷¹⁾というように、開拓民がのんびりした暮らしを楽しんでいるということもよく言われている。また、こうした様子は誌面に掲載された写真付で積極的に紹介された⁷²⁾。

このように移民村が発展し、開拓地においても内地と同様に不便はない、または多少の不便はあったとしても、そういう環境だからこそ豊かさ、楽しさがあるということが強調され、物質的にも精神的にも貧しい生活というマイナスイメージを払拭しようとしたのである。

最後に、開拓民が満人と友好的に生活する様子がよく語られたことも紹介しておく。「今年是我々が部落を引越しました。其時なんかも全部の満人が出て来て他へ引越してくれるなど頼んだりしました。人情の深さは内地以上に感じます。……行軍などがあつた時には満人に飯盒炊爨の飯を分け与へてそのお返しに野菜を買つたりすることがあります」⁷³⁾というように、満人との友好をエピソードとして紹介することで、民族協和の中心点満洲というイメージが強調されたのである。

このように「拓け満蒙」「新満洲」期においては、第一節と同様、開拓民の生活についても、日本内地との対照、そしてマイナスイメージの是正という二つの軸に沿ってイメージ形成されたことを明らかにした。

3 理想と相反する開拓地の現実

第一節、第二節で論じたように、「拓け満蒙」「新満洲」期においては、満洲の豊かなイメージが終始強調されていたが、時局の変化によってそうした宣伝は徐々に数を減らし、開拓地の現実が次第に明らかにされていく。本節では、かつて語られた理想像とは相反する開拓地の姿がどのように誌面で語られたかを論じる。

開拓民の生活の陰の部分⁷⁴⁾が明らかにされるのは基本的に「開拓」期ではあるが、「新満洲」においてもそれが全く指摘されなかったわけではない。義勇隊員の開拓地での苦勞が紹介された例として、昭和14年5月号、6月号、11月号、12月号に渡って連載された「土と戦ふ」という青少年義勇軍隊員菅野正男による現地報告が挙げられる。この中ではそれまで誌面では語られることのなかった開拓地での生活の厳しさが詳細に記述されている⁷⁵⁾。ただし、紹介文において、「その内容に就いては当事者の手落ちが少年義勇隊をかくも苦しめたる暴露にもなり、再

びかかることを繰り返すなど云ふ警告でもあると云つた人もある。それも一理あると思ふが、大綱としてはこの苦難を征服した尊い記録として掛なしに読むべき本であらう」⁷⁶⁾とされているように、満洲開拓の問題点を突くというよりもむしろ、更なる満洲開拓の発展のために、困難の中でも努力する義勇隊員の美談を紹介することにその主眼は置かれていた。

以上のように開拓地の厳しい状況を指摘した記事が例外に過ぎなかった「新満洲」とは異なり、「開拓」においてはそうした記事が数多く見られるようになる。さらにその記述の仕方も「新満洲」期とは違い、問題点を鋭く指摘している。具体的には、開拓地における食糧不足、無肥料農業の不可能性、乳児死亡率の高さなどの問題点が突かれることになる。「現実の問題として非常な悩みは、米もできなければ麦もできない。すると開拓に来た我々が何を喰べるか、といふことが問題になる」⁷⁷⁾、「一般に内地では満洲農業は無肥料である、と云ふ観念が頗る強く普及されて居るが、この観念は改められなければならない。……将来、永住しやうと云ふ日本の開拓団としては必ず将来の肥料対策は考慮して置く必要がある」⁷⁸⁾、「或る部落なんかでは昨年度に生れた子供が全部亡くなつてゐるところもありました」⁷⁹⁾というように開拓地の厳しい現実が暴露されたのである。「開拓」がかかる批判論に埋め尽くされていたわけではないが、このように具体性や継続性を伴って満洲移民を批判することは以前にはなかったことであった。さらに、これらはかつて満洲の魅力として盛んに取り上げられていた事柄と正反対の現実であり、こうした問題提起が誌面に表れていることは戦時下の勞力不足によって満洲開拓政策が行き詰まっていた当時の状況を反映していると言えるだろう。

こうした傾向は日米開戦後の開拓政策の優先度の低下によってさらに鮮明になり、終末期には以前の宣伝とはかけ離れたショッキングな生活実態も暴露されることとなる。最も象徴的なものは昭和19年9月号に掲載された「義勇隊の保健状況(上)」という記事である。これは、青少年義勇軍の現地訓練施設の衛生視察を行った医学博士田澤鏡二による報告書であるが、その中では、「入院者は百名位で、……二中隊などは健康で働ける者は二百三十二名の中、三十名位であつて、五十名とはならなかつたらう。……病室を廻つて見て、布団を上げて見ると大便をして居る。それを詰ると暖かいからすると言つた者がある。穢いどころではなく、無茶苦茶であつた。……その当時は部屋の中も土足で歩き廻つて居り、廊下には小便がしてあり、糞便などもしてあつて、……糞便と凍傷の膿で汚れて、ランブ一つの暗いやうな所に寝て居つた」⁸⁰⁾という状況まで明らかにされた。この

頃には、内地の日本人にも満洲が「楽土」ではないということは周知の事実となっていたのであろう。さらに満洲開拓の優先度の低下によって開拓政策が明確な指針を欠く中で、場当たりの苦肉の策として、満洲の現実を紹介することにより内地の指導者層に意見を求めたいというのが実際の思いであったのではないだろうか。

このように「開拓」期においては、雑誌の性格、そして満洲開拓政策を取り巻く状況の変化から、以前の宣伝とは正反対の満洲開拓地の厳しい生活環境が明らかにされたのである。

小 括

以上、第一節、第二節では、「拓け満蒙」「新満洲」において日本内地との対照性の強調とマイナスイメージの払拭という二つの軸に沿って、写真も用いながら満洲を楽土としてアピールするとともに移民村での開拓民の生活も豊かな部分が強調されていたことを明らかにした。第三節で論じた「開拓」期に入ると内地の労働力不足による開拓政策の優先度の低下を背景に、「拓け満蒙」「新満洲」のように満洲の良い部分のみを強調することはなくなり、それまで描かれていた豊かなイメージとは正反対の開拓地の厳しい現実が誌面で紹介されたことを明らかにした。

「楽土満洲」という誇大なイメージから厳しい現実の暴露への変化は、第一章第一節で論じた開拓政策の展開とその後の優先度の低下という流れに連動したものであり、第二章で明らかにした宣伝の変化と同時期に表れた共通の変化であった。

終 章

本稿では、満洲移民助成機関であった満洲移住協会の機関誌「拓け満蒙」「新満洲」「開拓」において、どのような満洲イメージが展開され、満洲開拓がいかなる手法をもって宣伝されたかを検討してきた。その結果、以下のことが明らかになった。

第一に、満洲開拓政策の展開と雑誌の性格の関係である。満洲開拓政策は満洲事変後に急速に展開されたものの、戦時下の労働力不足という壁に突き当たり、その優先度が低下した。このことが雑誌の性格にも影響を与え、「新満洲」期まで

の誌面は一貫して満洲開拓の良い部分だけを強調した楽観的な宣伝に埋め尽くされていたにもかかわらず、「開拓」期にはそれが大きく変化し、満洲移民の問題点も突かれるようになったのである。

第二に、満洲開拓がいかに理想を目指す素晴らしいものであるかを他の移民との比較を通して読者に説きながらも、満洲開拓が重要性を持つ要因として誌面で語られる事柄は時期によって変化を見せたこと、そして日米開戦後においては、かかる積極的な宣伝に代わり、開拓政策の問題点や、それまでの極端な宣伝姿勢に対する批判が噴出したことである。

第三に、満洲という土地の描き方の変化である。「新満洲」期までは、日本内地との対照性の強調とマイナスイメージの払拭という二つの軸に沿って、楽土としての満洲をアピールするとともに満洲での開拓民の生活も豊かな部分が強調されていたが、「開拓」ではそれまでのような豊かなイメージとは正反対の開拓地の悲惨な現実も明らかにされたのである。

戦時下における内地の深刻な労働力不足によって、満洲移民政策は国策でありながらもその重要性を低下させられていった。満洲移民は満洲事変から終戦までの期間に、急速に発展し頓挫したわけである。第一章第一節で概観したこの一連の展開に連動した満洲開拓の位置づけの変化が「拓け満蒙」「新満洲」「開拓」という拓務省に深く関連した移民宣伝誌にはそのまま反映されている。つまり、第一章で解説した雑誌の性格そのものにしても、第二章で明らかにした満洲開拓のイメージや第三章で明らかにした満洲という土地のイメージにしても、いずれにも共通した積極的な宣伝から現実の暴露への変化には、その満洲開拓の位置づけの変化が如実に表れているのである。

最後に、他の新聞や雑誌、さらには映像媒体をも含めた網羅的な分析により満洲イメージを明らかにすることが今後の課題として残されていると言えよう。それにより本稿で明らかにした宣伝誌の特徴に更なる考察が加えられることが望まれる。

注

- 1) 「満洲開拓史」(満洲開拓史刊行会、1966年)による数値。正確な満洲移民者数が明らかになっているわけではなく、その数値は文献によって若干のばらつきが見られる。
- 2) 前掲「満洲開拓史」、満洲移民史研究会編「日本帝国主義下の満洲移民」(龍溪書舎、1976年)、山田昭次編「近代民衆の記録6—満洲移民」(新人物往来社、1978

- 年)、上笙一郎『満蒙開拓青少年義勇軍』(中央公論社、1973年)、白取道博『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』(北海道大学出版会、2008年)、櫻本富雄『満蒙開拓青少年義勇軍』(青木書店、1987年)など。
- 3) 小林弘二「『開拓』」(小島麗逸編『戦前の中国時論誌研究』〈アジア経済研究所、1978年〉)や『拓け満蒙』『新満洲』『開拓』解説・解題・総目次(不二出版、1998年)は優れた解題ではあるが、詳細な内容分析は行われていない。また、相庭和彦他『満洲「大陸の花嫁」はどうつくられたか—戦前期教育史の空白にせまる—』(明石書店、1996年)でも、『拓け満蒙』『新満洲』『開拓』について調査されているが、その記述は女性移民関連のみである。
- 4) 昭和17年11月に大東亜省に統合。
- 5) 満洲移民を強力に推進したグループとして、いわゆる加藤完治グループが知られている。このグループは、加藤、東大農学部教授の那須皓、京大農学部教授の橋本伝左衛門、農林次官の石黒忠篤、農林省農務局長の小平権一の五名で構成された。詳細は前掲『日本帝国主義下の満洲移民』第一章を参照。
- 6) この第一次移民団に始まり、昭和10年の第四次移民団まで合計1,800名が試験移民として送出された。詳細は前掲『満洲開拓史』を参照。
- 7) 関東軍・陸軍省は以前から満洲移民大量送出に積極的であり、関東軍はそれまでも幾度となく満洲大量移民案を作成していたが、政府はこれを受け入れなかった。特に満洲移民に批判的だったのは大蔵大臣高橋是清であり、彼が二・二六事件で殺害されたことも満洲大量移民の実現を後押しした。この一連の流れに関しては、前掲『日本帝国主義下の満洲移民』第一章を参照。
- 8) 「満洲農業移民百万戸移住計画」の全文は前掲『満洲開拓史』175、176頁を参照。
- 9) 以上の移民規模と開拓民の種類は昭和14年に成立した「満洲開拓政策基本要綱」による分類である。「満洲開拓政策基本要綱」についての詳細は、前掲『満洲開拓史』第八章を参照。
- 10) この点については、前掲『日本帝国主義下の満洲移民』第一章において詳しく論及されている。
- 11) 『満洲開拓年鑑 康徳十一年・昭和十九年版』(満洲国通信社、1944年)を参照。
- 12) 詳細は前掲『満洲開拓史』156-159頁を参照。
- 13) 満洲移住協会の設立過程、活動についての詳細は、前掲『日本帝国主義下の満洲移民』第二章を参照。
- 14) 前掲小林弘二「『開拓』」144頁。
- 15) 加えて永井柳太郎も昭和19年12月に死去するまで引き続き協会理事の任にあった。
- 16) 大蔵公堂「創刊の辞」(『拓け満蒙』昭和11年4月25日)。
- 17) 執筆者の紹介は前掲小林弘二「『開拓』」に詳しい。
- 18) 以下は前掲小林弘二「『開拓』」を参考とした。
- 19) 創刊号から第4号(昭和12年4月25日)までは不定期刊、第5号となる昭和12年9月号以降月刊。
- 20) 前掲「創刊の辞」。

- 21) 「『拓け満蒙』題号変更!!」(『新満洲』(『拓け満蒙』昭和14年3月1日)。
- 22) 「編輯後記」(『新満洲』昭和14年9月1日)には「本誌の読者の大部分が農村の青年」だと記述されている。
- 23) 例えば、三宅正一「努力問題と農村の再編成問題に就いて」(『新満洲』昭和15年1月1日)、久保佐士美「満洲開拓地の農業経営改善の目標は何か?」(『新満洲』昭和15年1月1日)、碓氷茂「人間の努力の乱費をするな」(『新満洲』昭和15年2月1日)など。
- 24) 「編輯後記」(『開拓』昭和16年1月1日)。
- 25) 第二章第三節、第三章第三節で詳述する。
- 26) 前掲「創刊の辞」。
- 27) 広瀬寿助「巻頭言」(『拓け満蒙』昭和11年11月1日)。
- 28) こうした二、三男以下の問題は誌面においても頻繁に指摘されている。例えば、「移住地だより」(『拓け満蒙』昭和12年10月1日)、「満移ニュース」(『拓け満蒙』昭和12年10月1日)、中山悦三「満洲移民と青年団」(『拓け満蒙』昭和13年3月1日)など。
- 29) 「満移ニュース」(『拓け満蒙』昭和12年10月1日)。
- 30) 前掲「満洲移民と青年団」。
- 31) 満洲移住協会宣伝部記「満蒙開拓青少年義勇軍の新制度成る」(『拓け満蒙』昭和13年2月1日)。
- 32) 玉井清編『戦時日本の国民意識 国策グラフ誌「写真週報」とその時代』(慶應義塾大学出版会、2008年)第二章では、戦時下の食糧問題に焦点を当てたメディア分析が行われている。
- 33) 「巻頭言 食糧の増産と満洲開拓」(『開拓』昭和16年4月1日)。
- 34) 三宅正一「努力問題と農村の再編成の問題に就いて」(『新満洲』昭和15年1月1日)。
- 35) 「転業問題と満洲開拓を語る座談会」(『開拓』昭和16年1月1日)。第一章第一節で言及した転業移民は、この産業再編成の動きの中で脚光を浴びた。
- 36) 志村陸城「大東亜戦争と満洲開拓の意義」(『開拓』昭和17年2月1日)。
- 37) 例えば、前掲「大東亜戦争と満洲開拓の意義」の他、「編輯後記」(『開拓』昭和17年1月1日)、山名生「大東亜建設の拠点を確立せよ」(『開拓』昭和17年3月1日)など。
- 38) 前掲「大東亜戦争と満洲開拓の意義」。
- 39) 「移民を率いて朝陽屯へ」(『拓け満蒙』昭和12年4月25日)。
- 40) 「満洲移住協会創立披露会の状況」(『拓け満蒙』昭和11年4月25日)。
- 41) 例えば、「拓け満蒙!!大陸めざして鉄の戦士出動」(『拓け満蒙臨時増刊』昭和12年12月1日)。こうした傾向は写真に限らず文章にも表れている。例えば、「編輯後記」(『拓け満蒙』昭和12年12月1日)では、「(少年移民の先遣隊が)出征兵士と全く同じ様に歓呼の聲に送られて出かけて行つた」と論じられている。
- 42) 例えば、「懸賞募集義勇軍の歌をつる!!」(『拓け満蒙』昭和13年4月1日)、「興亜文学を提唱す!」(『新満洲』昭和15年1月1日)、「懸賞募集短篇小説を募

- る1」(『開拓』昭和16年4月1日)など。
- 43) 「満移ニュース」(『拓け満蒙』昭和12年10月1日)。
- 44) 「陸の生命線へ進むもの 兵庫県満洲移民感激篇」(『拓け満蒙』昭和13年3月1日)。
- 45) 「銀座から大陸の花嫁に」(『拓け満蒙』昭和13年12月1日)。
- 46) 例えば、金澤郁子、山田政子「北満移住地婦人のことども」(『拓け満蒙』昭和13年2月1日)、「女の立場から見て来た満洲を語る座談会」(『新満洲』昭和15年1月1日)、佐藤与吉「義勇軍の手記(その1)ある婦人達の会話」(『新満洲』昭和15年4月1日)など。
- 47) 大陸の花嫁のイメージ形成に関しては、前掲「満洲「大陸の花嫁」はどうつくられたか—戦前期教育史の空白にせまる—」に詳しい。花嫁募集宣伝について同書249頁では、「言葉や視覚によるロマンティックなイメージを重視し、若い女性の感性や想像力に訴えかける方法が取られた」と論じられている。
- 48) 「南郷村満洲移民実話集」(『拓け満蒙』昭和12年11月1日)。
- 49) 誌面においてもこの点が指摘されることが多い。例えば、「座談会 少年義勇軍を志して(内地訓練所にて)」(『拓け満蒙』昭和12年12月1日)、「永安屯へ行く家族移民のよもやま話」(『拓け満蒙』昭和12年12月1日)、「開拓民を送る港の座談会」(『新満洲』昭和14年4月1日)など。
- 50) 楠喬「開拓問題に関する覚書(その1)」(『開拓』昭和16年8月1日)。
- 51) この時期、送出不振の問題を厳しく突いた意見は数多い。例えば、稲葉次郎「満洲開拓民の送出不振」(『開拓』昭和16年3月1日)、辻清「昭和17年度義勇軍送出運動を省る」(『開拓』昭和18年5月1日)、出原忠夫「昭和十八年度満洲移住協会開拓運動の大綱」(『開拓』昭和18年6月1日)など。
- 52) 「座談会 東京から満洲へ! 東京市出身の義勇隊員語る」(『開拓』昭和18年5月1日)を参照。
- 53) 「満洲開拓政策の新動向を語る座談会」(『開拓』昭和16年5月1日)。
- 54) 「新情勢に対応する満蒙開拓青少年義勇軍の意義研究座談会」(『開拓』昭和17年6月1日)において、「義勇軍最初の出発と云ふのを色々議論的に難しいことを言ふけれども、これは大義名分であつて結局支那事変が始つて開拓民がなかなか出方が悪くなり、更に併行して満洲に連く日本人を送つて埋めなければならぬと云ふところに本当に義勇軍が生れた理屈はあるのではないかと思ふ」と指摘されている。
- 55) こうした問題が指摘されている記事としては、「新情勢に対応する満蒙開拓青少年義勇軍の意義研究座談会」(『開拓』昭和17年6月1日)、後藤嘉一「義勇隊開拓団の性格」(『開拓』昭和17年11月1日)、「決戦下の満洲開拓運動座談会」(『開拓』昭和18年4月1日)など。
- 56) 「青少年義勇軍現地報告—御親閲参列部隊を囲む座談会」(『開拓』昭和16年7月1日)。
- 57) 小林平「開拓運動と分付計画の必然性」(『開拓』昭和16年6月1日)。
- 58) 昭和18年に決定された「入植確保のための採るべき方策」には、宣伝方針とし

- て、「満洲開拓は極めて容易にしてかつ個人的に有利なる事業なるがごとく誇張して宣伝し甘言をもって募集するがごときことを全然廃止」することが挙げられている。詳しくは前掲「満洲開拓史」452頁を参照。
- 59) 例えば、「豊稔の移住地」(『拓け満蒙』昭和12年9月1日)、「新しき土北満の沃野を拓く」(『拓け満蒙臨時増刊』昭和12年12月1日)、「我等は若き義勇軍」(『拓け満蒙』昭和13年9月1日)など。
- 60) 「開拓地のちかごろ」(『新満洲』昭和14年10月1日)。
- 61) グラフPR誌の「満洲グラフ」にも類似の写真が散見される。例えば、「楽しい野良」(『満洲グラフ』昭和13年11月1日、南満洲鉄道株式会社)など。
- 62) 「婦人欄」(『拓け満蒙』昭和13年3月1日)。
- 63) 「移住地を語る」(『拓け満蒙』昭和11年4月25日)。
- 64) 広瀬寿助「満洲匪賊ノ話」(『拓け満蒙』昭和11年11月1日)。
- 65) 「北満の日本村より」(『拓け満蒙』昭和11年7月5日)。
- 66) 永雄策郎「農業政策と対満農業移民」(『拓け満蒙』昭和11年7月5日)。
- 67) 「大陸の家庭建設打明け話—開拓女性に訊く座談会」(『新満洲』昭和15年5月1日)。
- 68) 「開拓地のちかごろ」(『新満洲』昭和14年5月1日)。
- 69) W生「入植三週年を迎えて」(『拓け満蒙』昭和11年4月25日)。
- 70) 宗光彦「大移住地区構成の迎春」(『拓け満蒙』昭和13年1月1日)。
- 71) 太田文義「大陸の花嫁に望むもの」(『拓け満蒙臨時増刊国策満洲移民の知識』昭和13年11月15日)。
- 72) 例えば、「移住地の文化施設」(『拓け満蒙』昭和12年11月1日)、「生めよ、殖えよ、地に満てよ!!」(『拓け満蒙』昭和12年4月25日)など。
- 73) 「義勇軍現地報告隊に訊く座談会」(『新満洲』昭和15年2月1日)。
- 74) 例えば、菅野正男「土と戦ふ青年義勇隊現地報告上」(『新満洲』昭和15年5月1日)には「最初の試練であつた寒さは、粟飯より強く感じないで過去へ押しやつた。粟飯と混布汁だけの辛さは、それよりも苦しい運材することに依つて乗り切ることが出来た」という経験や、「二百八十名の生徒の中二百四十名はアミパー菌があつた訳だつた。これを聞いた時には道に皆驚いた」という経験が語られている。
- 75) 「菅野正男著『土と戦ふ』—諸名士に聞く読後感」(『新満洲』昭和15年3月1日)。
- 76) 「開拓地の建設と経営に就いて開拓団長の体験を訊く座談会」(『開拓』昭和16年1月1日)。
- 77) 「満洲特設農場現地報告」(『開拓』16年1月1日)。
- 78) 「開拓地の生活指導—内地の女性の抱負を訊く座談会」(『開拓』昭和19年5月1日)。
- 79) 田澤鏡二「義勇隊の保健状況(上)」(『開拓』昭和19年9月25日)。もっとも、この記事に掲載することに対しては編集部にも躊躇があつたようであり、翌月の「編輯後記」(『開拓』昭和19年10月25日)では、「前号より二回に亘つた田澤博士

の『義勇隊の保健状況』は、あまりにも生々しくはあるが、義勇軍も、もう模索の時期ではない筈であるから、敢て掲載した真意を推察くだされんことを願ふ」とコメントされている。

「むかし哲学」から「いま哲学」へ
——「哲学者ソクラテス」と「ソフィスト」の狭間
から見る「哲学」——

渡部 正雄
(堤林研究会4年)

はじめに

I 古代ギリシアにおける混沌

- 1 古代ギリシア
- 2 「哲学者」と「ソフィスト」の混同

II 「ソフィスト」たち

- 1 「ソフィスト」
- 2 プロタゴラス
- 3 ゴルギアス

III 「哲学者ソクラテス」

- 1 「ロゴス」の解釈
- 2 「ロゴス」から生じる「ドクサ」
- 3 「ロゴス」の時味
- 4 高貴なソフィスト=ソクラテス
- 5 「無知の知」と「不知の自覚」

IV 「むかし哲学」から「いま哲学」へ

- 1 「母なる哲学」
- 2 生の在り方に捧げるソクラテスの「哲学」

おわりに

はじめに

「しかし、ソフィストは多くの姿で現れてしまったので、ソフィストが本当は何であるのかについて、自信をもって確信し、真実を語るのに何と云えば